



第1回検討会の振り返り

令和2年11月13日

デジタル化の急速な進展やニューノーマルに対応した
都市政策のあり方検討会

第2回資料-3

第1回検討会の振り返り

(1) 目指すべきまちづくりの方向性

- デジタル化の急速な進展やニューノーマルへの対応により、生活スタイルや都市活動にどのような変化が生じているのか。

○主なご意見（要約）

- デジタル化の急速な進展により、パーソナライズされたサービス提供等の新技術に対する期待感が高まっている。ただし、スマートシティを取り巻く社会状況については大きく変化していないのではないか。特に個人情報の提供等についての社会的受容性はあまり変わっていないのではないか。
- 新型コロナ危機を契機として、リモートワークの主流化等のオンラインとリアルハイブリッド化、衣食住遊やゆとりのある生活重視の思想、環境価値の見直しによる地方への拠点の移転など、都市を取り巻く状況は変化しつつある。
- 特にオンラインとリアルハイブリッド化により、地方においてもクリエイティブな活動が可能となってきているのではないか。
- ニューノーマルによって公共交通が弱まることになるならば、公共交通ネットワークを都市アセットとして維持することが課題となっていくのではないか。

第1回検討会の振り返り

- こうした生活スタイルや都市活動の変化により、今後目指すべきまちづくりの方向性はどのように変化していくのか。

○主なご意見（要約）

- スマートシティによる市民のQoL向上のポテンシャルは高いが、社会的受容性は未成熟。このため、市民が信頼に基づきデータを提供できるよう、行政界にとらわれず、市民がまちづくりを“自分ごと”として考えられる生活圏を単位にまちづくりを考える必要があるのではないか。これがQoLの向上にもつながるのではないか。
- 公民連携のためには、データをオープンにすることも重要ではないか。また、データの信頼という点から、地域の責任者が主体的な役割を果たすことが必要ではないか。
- 技術的展開には予測不可能な部分があるため、目指すべきまちづくりの方向性には、テクノロジーの変化等に対応できる柔軟性をもたせるべきではないか。
- 技術によって課題解決をする、という方向性には限界がある。スマートシティ等の都市アセットの利活用は、技術ドリブンではなく、偶発性や環境資本、居心地の良さ等の都市の本来価値を創造する観点から考えることが重要ではないか。
- 今後のまちづくりには、フィジカル空間とサイバー空間のハイブリッド化の観点が必要ではないか。都市アセットは全国どこにでもあり、都市空間における密度コントロールなど、都市アセットをさらに利活用するためのテクノロジー導入は、国が主導的役割を果たすべきではないか。

第1回検討会の振り返り

- こうした生活スタイルや都市活動の変化により、今後目指すべきまちづくりの方向性はどのように変化していくのか。（続き）

○主なご意見（要約）

- E.ハワードのスリーマグネットモデルを援用し、フィジカル、サイバー、フィジカル&サイバーという概念図を用いることが有効ではないか。
- 街路空間をオープンテラスとして活用するなど、都市アセットの利活用について、現場レベルにも浸透する形で一層進めるべきではないか。
- 地方都市についても、リモートの進展等を踏まえればクリエイティブな活動を行う場として位置付けるべきではないか。郊外については、居住の場だけでなく、仕事の場とも融合すべきではないか。大都市は、居心地も良く機能が極めて高い都市を目指すべきではないか。
- 新型コロナ危機を契機としたまちづくりの方向性の検討に際しては、国土計画との連携が重要ではないか。